

## 荒れた朝風

こゝ北フランスはルーアンの町の朝、かそかに潮の香を送るノルマンディーの海風もやさしく、すぎ逝く夏の朝雲が、早くも秋の気配を見せて、静かに南の空へ流れてゆく。

「さわやかな朝。朝のル・レ（牛乳）を買いに出たマダム・シモンの気分もいたってさわやかであった。……アラ、ハガキが来てるわ、誰からか知ら……。」「いとしのあなた、九月八日の日を忘れちゃイヤよ。ネ、きつと来てね。待ってるわ。……あなたのミッシュェルより」と。とたんに、さわやかであったマダム・シモンの顔がピリッと引きつった。——チキショウ、うちの宿六ヤロー、まだあの女と会っているんだな。こんな変名をつかって。ウウン、ゆんべもベットのの中では、あんな調子の良いこと云ってシトをうれしがらせたくせに……。クヤシイ——。「ちよいとッ……。あなたッ」。牛乳瓶を玄関にたたきつけると、たちまち寝室へ飛び込んで行って亭主を引きづり出した。庭の芝生に突きころがして、のしかかって行った。体重三十貫の巨体のたくましくお尻にどすと亭主を圧えつけて、わめき始めた。眠っていた番犬がけたたましくほえ出し、鶏舎の鶏がさわぎ出した。おどろいたのは亭主である。バヂヤマのまま、朝つゆの芝草の上に首をねじふせられて「ソソソ……。ソレワ……。」と云ったきりあとの言葉が出ない。

いやこの亭主ばかりではなかった。この日、同じ朝、ルーアンの町中至るところで亭主



ノルマンデーの女。  
Itaya.



## 秋まつり

ピイピイヒヤラリ ピイヒヤラリ

鎮守の森の村まつり

山の谷間にこだまして

かかしがとんぼにはなしてた

村では今年も豊作じゃ

どもが恐妻にとつちめられたのである。「アタシ、別れるわ」と泣き泣き離婚手続きをしに行った若い妻もあった。細君に蹴とばされて窓ガラスに頭を突き込み、「××氏（四十才）全治二週間の傷を受く」なんて新聞記事になった亭主もあった。牛の背骨を打ち切る肉切り刀を振りまわす細君に追いまわされて町中を逃げまわったのは肉屋の主人。角を立てた細君に追いかけて物干台の上に逃げ上った洗濯屋の主人は一日中、空からの炎天と細君の怨天に照らされてミイラのように干し上げられたのである。今やルーアンの町の亭主たちは吹き荒れる恐妻センブーに木爆以上のオノノキにふるえ上ったのである。ところがである。「ミッシェルって女、なんてズウズウしい女だらうブンブン」と細君たちが一呼吸ごとに大きな胸を上げ下げ高鳴らせて怒っているところ「シマッタッ……」と真青な顔になってうろたえたのは、この町のバリ取り引き興業所の役員たちであった。「チト、葉がききすぎたワイ……」と。

このたねをあかせば、バリはモンマルトルのあるバレーの一座が夏のバカンス（休み）を利用してこの町に乗り込んで来ると云うだけの話。そこで町の取引所が興業元になって一と稼ぎしようとたくらんだ、筋書きの広告ハガキだったのだ、さりとて亦、罪なハガキではあった。

いやはや……。

画家 板谷房